

坂元彦太郎先生を囲んで

(第二回)

出席者

立川多恵子 (十文字学園女子短大教授)

中村 悦子 (大妻女子大学助教授)

守永 英子 (お茶の水女子大附属幼稚園)

本田 和子 (お茶の水女子大教授)

倉橋先生と子どもの雑誌

坂元 倉橋先生が雑誌と直接に関係されたのは、「子どものくに」からなんです。無論そのころは「赤い鳥」運動のシンパであられた訳なんです。先生は「金の船」「金の星」もお好きでした。

「赤い鳥」が大正七、八年。「子どもの国」が大正十一年。大正デモクラシーのころですね。

何が一番の先生の一生を通じて、大きな部分を占めているかという点、子どもの雑誌との関係です。他は皆ちぎれちぎれになってたりするけど、これだけは最後までおやりになった。

「子どもの国」から始めれば大正十年ぐらいからですが、おそらくそれより前に絵描きさんたちとの交流があった。それから、北原白秋とか、野口雨情とは年令が近かったんです。彼らと仲良しでしたね。それから西条八十や武井武雄さん、岡本帰一とも交流がありました。

そういう人たちが子どものことを描いてくれたり、子どものことを歌ってくれたりするのは、それが自分の描いた絵であり、自分のつくった詩である、という感覚をもっておられたようです。その点はほくは偉いと思うんです。先生は童話もつくってないでしょ。

—— そうですね。

坂元 つくろうと思えばつくれる資質や才能をもっていた方であるのに、やらなかった、というのは、結局、編集者だった、と思うんです。世の中は編集者をそれほど大切だと思ってくれないけれど、社会的使命なんですね。自分はやらなくて、人にやらせるが、それを自分がやっただと感ぜられる、という感覚を私も大分学ぼうと思ったんですが、なかなか倉橋先生ほどまでいかなかった

ですね。

—— 倉橋先生が編集者のだというのはおもしろい指摘ですね。

幼児文化の建設

坂元 いろいろな童謡やら童画の先生達と仲良くなった頃、先生は外遊なさるんです。その時向こうから持ってこられたものが二つあります。一つは人形芝居。ヨーロッパの子ども達が非常に好きで熱狂しているのを見て、日本でもやったらいいんじゃないか、と。いわゆるギニョールなんです。大正十二年から十三年に、お茶の水一座と称しまして、人形芝居の舞台を盛んにやられました。

もう一つは木工、木材細工を持ってこられたんです。できるだけいろんな板切を使って、少し大きな仕事の子どもにさせたらいいっていうことを言われたんです。そうしたことが、及川先生や他の人に影響を与えて、皆が

やるようになりました。

先生は幼稚園について細かいことは全然おっしゃらなかったんですが、いろいろな文化的な活動を幼稚園の生活に入り込ませた。私は、倉橋先生の保育理論の功績よりも、このことの方がもっと大きいと思うんです。先生が、幼稚園の一つの保育理論の基本を立てられて、そしてそれをある程度園の実践にうつされたってこともあるけれど、前からの絵描き、お遊戯といったようなものだけでなく、文化的な活動を導入して、混然とした幼児生活から、幼児文化を建設しようとなさったということが特筆すべきことだと思うんです。

キンダー・ブック

それから、「キンダー・ブック」もそういう幼児の文化的な仕事の延長でした。もともとキンダー・ブックは精密な、非常に客観的な、機能的なものだったんです。

そこへ倉橋先生が入ってました。先生はもう少しロマン

チックな「赤い鳥」的なものを少しずつ入れていこう、という意図を持ってました。

そのころは非常に贅沢にいろいろな絵描きさんを使えた時代でして、東山魁夷や鈴木梅吉、ラギーザお玉などを使っていました。

数年前に「キンダー・ブック」の復刻版を出したことがあって、絵描きさんやその家族の方のところに承認をとりに行ったんです。その時東山さんのところにも行ったのですが、「こんなものを出してもらっては困る」とおっしゃいまして、こちらも困ってしまったことがあります。結局三個ぐらい差し換えましたかな。まあ東山さんは、かなり描いてくれましたね。その他、後で有名になる方もかなり描いていただきましたね。

まあ、当時のキンダー・ブックは、編集が時にやわらかくなったり、かたくなったり、試行錯誤を重ねてやっていたました。これもキンダー・ブックにライブル誌がなかったから出来たことかもしれません。

キンダー・ブックは値段も安く、情操教育にも役立つ

というので、かなり売れたんですね。また、小学校には、教科書があるのに、幼稚園には何もない、教科書に代わるものとしてキンダー・ブックという風潮もありましてね。それに便乗したのも確かです。

事実、当時店先には、ある程度為になつて、ある程度上品な本はそうなかったんですよ。そういう意味においても質的にも中心的なものであつたし、また販売政策上も成功したといえるでしょうね。

キンダー・ブックは昭和十五、六年頃がピークですね。そのころの作品は良いがありますよね。それ以降はだんだん戦時色が濃くなっていったんです。

一方「子どものくに」は「子どものくに」で良いところがありますよね。第一紙が良かったんで、絵の色が良かったんです。キンダー・ブックもそれに負けじとがんばったんですよ。

キンダー・ブックは戦争に休止しましたが、戦後私が一番思っていたのは、「昔のキンダー・ブックを出したいなあ」ということでした。フレイベル館が復活した

後、キンダー・ブックを出したいので話に来てくれ、と行って招待されたことがあります。ひょっとしたら、もう再発行されていたかもしれません。倉橋先生は大変喜んでおられました。

—— 昭和二十一年の八月に再発行されております。
坂元 そう二十二年だったかな。

まあ、そういうことで復活されて、昭和二十六、七年ぐらいは、ベストセラーじゃなかったでしょうか。農協の「家の光」が一番で、その次が「キンダー・ブック」だと言われていた時期があるんです。昭和二十年代の終わりごろだと思えます。

倉橋先生はそうだね。キンダー・ブックと幼稚園とどちらを一生懸命やってらしたかな。(笑)

倉橋先生の遺言

—— 坂元先生は、倉橋先生が昭和三十年に亡くなってから、ずっと編集顧問でいらしたのですか？

坂元　そうです。昭和二十六、七年から私に加勢に来てくれんか、という話はあったんです。その頃先生は病気をなさいまして、来てくれ、とおっしゃったんですが、私は五十才になったら、なんて冗談でごまかしていたんです。

亡くなる一月ほど前にまた勧誘がありました、「まあ、考えますわ」って答えたんですが、その後先生の息子さん（岡山にいて時々東京に出てくれれば良いんだから、後を見てくれと頼んでいる」と言われました。そしてその後亡くなられるんですが、私は、ここまで先生がおっしゃってくれるのだから、これは遺言だから、やらねばならない、と思いました。

それから毎月二回ずつ東京に出てきてやるようになってのですが、私は田舎におりますので、及川先生など三人に協力者になってもらいまして、四人が編集顧問で、毎月一回必ず編集会議を行う、という方式になりました。

当時、東京に出てくる度に、お茶の水に来て、幼稚園に寄っていたんです。だから、出張目的地もフレールじゃなくてお茶の水って書いていたんですが、本当にお茶の水に来ることになるとはおもわなかったですね。

他誌との競争

——先生が編集におなりになってから、最初の十年間はともかくとして、昭和四十年代には非常に多くの雑誌が創刊されました。そうした中でキンダー・ブックの革新にものごくご苦労なさったと思うんですが。

坂元　そうですね。確かに昭和三十年代には同じような雑誌が二、三ありましたが、独占に近い形でした。

その後私は幼稚園長になりましたね。これはダブって困るな、と思ったんですが、倉橋先生の教えを守って、決して営業にはタッチしませんでした。

他誌との関係ですが、独占禁止法ができるまでは、話し合って情報を明かしあっていたのですが、禁止法が出

てからは、打ち合わせをすることもできなくなりまして。いろいろ探りあったりしていたようですが、私はそれには関係しませんでした。

私は自分で恥ずかしくないものを作ろうと思っていました。皆まねたり、まねられたりしながら良いものを作っていくんです。同じようなものが多くでて、競争するのは結局は文化のためになりますからね。

今は子どもの数が減りましたからね。どの雑誌も大変なようですよ。

その中で、キンダー・ブックは作家や画家、特に画家を大事に育ててきました。日本では、童画、子どものための絵を描くのが職業として成りたてているんです。私にはこれは良いことだと思いますよ。子どもには、下品な、つまらない絵という訳にはいきませんからね。キンダー・ブックの第一の功績はそうした状況をつくりだした一人者であった、ともいえると思います。

だけど絵の画料は割に高かったんですが、原稿料が安いものですか、幼児雑誌の文章というのはあまり良い

のがない。

しかし、編集というのはむずかしいですね。幼児教育の研究者などが良い編集者か、というところと一般的にそうではないんです。もちろん例外もありますけどね。やはり編集者というのは、独自の才能とカンをもっている人ではないかね。私なんかも専門にやるとダメだと思っていますよ。倉橋先生もそこが成功されたゆえんじゃないでしょうか。横から見て客観的に批判できましたからね。